

北川啓三

北川啓三は明治 38 年に初代ねぶた名人北川金三郎の次男として鍛冶町に生まれた。通称「北川のオンチャ」で、12 歳から父についてねぶた作りに加わった。また、幼少のときから父の師である坂田金作にも教えも受けていた。14 歳には稼業の左官業も取り仕切るようになる。大正末頃から東京方面に仕事の修業にいったが、このときに歌舞伎座などで芝居をよく見た。啓三は父(金三郎)の代わりにねぶたの大半を作っていた。特に絵には自信をもっていた。この父子の仕事内容(どちらが作ったか)にはさまざまな証言があるが、真偽のほどは定かでない。また、どちらのねぶたがすぐれているかも論議される。

啓三は芸術家肌のねぶた師であり、人柄も厳しい人であったという。昭和 30 年代が絶頂期ですぐれたねぶたを次々に生み出していった。昭和 37 年から制定された第一回田村暦賞は啓三の「村上義輝吉野の関所」(日本通運)であった。しかし、昭和 40 年代になると賞から遠のいていった。しかし、彼の残した業績は大きいというので昭和 61 年に第二ねぶた名人を贈られた。晩年には小型ねぶたを作っていたといい、昭和 63 年に他界した。

青森ねぶた誌(平成 12 年 3 月 31 日発行)から